

「主の御手に委ねて～ある方からの葬儀依頼で私が思ったこと～」

6月のある日の午前中に教会の電話が鳴りました。電話に出た方は、「越山さんですか。私は〇〇です。実はお父さん（夫）が今日天国に行ってしまいました。それでどうしようかといういろいろ悩んだのですが越山さんに告別式をして頂けないでしょうか」という相談でした。私は一瞬、心の中で教会に〇〇さんという信徒の方はいない。一体この方はなぜ私の事を知っているのかと電話の応対をしながら思い巡らせていました。とにかくまずはお近くにいらっしゃるといことなので「今日の何時にお伺いいたしますね」とお伝えして受話器を置きました。それから、教籍簿、信徒名簿を確認してみましたがやはりどこにも〇〇さんのお名前はありません。でもなぜか聞き覚えのある声だったのです。そしてはっと思いついたのです。それは、私が日頃の運動不足を解消するために週1回通っているクリニック内にあるエクササイズに来られていた方だったのです。その方はどなたにでも気さくに声をかけておられ、私もはじめてエクササイズに緊張しながら行った時に声をかけてくださった方でした。周囲に気配りが出来るその方の配偶者（夫）は数年前に病気になり、それ以降ずっと療養を続けていておられました。そして〇〇さんは私にこんな事を何気なく語っておられたのです。「越山さんは牧師さんなんですか。もし夫が天国に召されたらお祈りをお願い出来ませんかね？」と。私はその時の会話を思い出したので

す。正直に申してその願いは大変失礼ながら私は忘れていたのです。しかし、〇〇さんにとっては切なる願いであったのです。〇〇さんや亡くなられた配偶者の方は、洗礼を受けられておりません。亡くなられた配偶者のお母様（〇〇さんにとっての義母）は洗礼を受けられており、沖縄のバプテスト教会で今から数十年前に沖縄のバプテスト教会で葬儀を行ったことを伺いました。〇〇さんは信者ではないのですが夫に万一の事があった場合は、教会で行いたいという思いをずっと心に抱いて毎日を過ごされていたのでした。私は〇〇さんからの申し出を承って葬送式をさせて頂くことにしました。聖公会の祈祷書には「葬送式」の他に、洗礼を受ける事が出来ずに召された方のために「葬送の祈り」が祈祷書に収められています。未信徒の方の葬送式を教会でさせて頂くことはこれまでもありましたが、それは信徒の方のご家族やご親戚でした。今回の〇〇さんからの申し出は「教会」のつながりとは別のつながりの中での出来事でした。聖パウロが「私は宣教のためなら何でもします」と言われていますがその事を今思います。神様が主体となって進められている「神の国運動」のしるしは「教会」の中にももちろん豊かに顕されていますが、「教会」の外にも顕されていることをこの度の〇〇さんからの葬儀依頼を通して深く感じました。召された方を主の御手に委ねてお祈りさせて頂きました。（司祭 越山哲也）